

第五章 アン、ケーキを作る

長い夏休みは、6月の終わりに始まります。

フィリップス先生はアボンリー学校を去って、年老いた牧師も教会を去ります。

新しい牧師がアボンリーにやって来ますが、彼の名前はアランさんです。

アランさんは若い男性で、かわいい奥さんがいます。

マリラとマシューは、新しい牧師と彼の若い奥さんに会いたいと思います。

「私、水曜日にアラン夫妻をお茶にお招きしようと思っているの」とマリラは言います。

「アラン夫妻のためにケーキを作ってもいい？」とアンは尋ねます。

「ええ、それはいい考えね」とマリラが言います。

水曜日の朝、アンは早起きしてケーキを作り始めます。

「私、アラン夫妻のためにおいしいケーキを作りたいわ」とアンは思います。

アンは午前中ずっと、キッチンで働いています。

アンはケーキをオーブンに入れて、40分後にケーキの準備ができます。

「ケーキ、おいしそうだわ」とアンがマリラに言います。

「さあ、テーブルにお茶のカップとお皿を置くわね。それと、テーブルにお花も何本か必要ね」

アラン夫妻は午後4時にやって来ます。

「私たちのお家へようこそ！」とマリラがほほ笑みながら言います。

マリラとマシューは新しい服を着ています。

「ありがとうございます」とアランさんが言います。

「なんてすてきなテーブルなの、お花があって！」とアラン夫人が言います。

アンは、マリラとマシュー、そしてアラン夫妻と一緒にテーブルにつきます。

皆はおしゃべりをして、笑います。

それからアンが尋ねます。

「ケーキはいかがですか、アラン夫人？」

「ええ、いただくわ」とアラン夫人は言います。

「ケーキは好物なの」

アンはアラン夫人のために、いくらかのケーキを切ります。

アラン夫人はケーキをひとかけら口に入れますが、それが気に入りません。

「ケーキに何かおかしいところでもあるのかしら？」とマリラは考えます。

マリラもケーキをひとかけら食べます。

「アン、このケーキ、何かおかしいわよ！」

「あら！」とアンは言います。

「私はバニラを少しケーキの中に入れたの」

アンはキッチンに走って行って、バニラの小さな瓶を取ってきます。

瓶には「ケーキ用バニラ」と書かれています。

マリラは瓶を開けて、「これはバニラじゃないわ！ 薬なの！ 私はたまたま古い瓶を使って、その中に薬を入れておくのよ。本当に申し訳ないわ」と言います。

アンはマリラとアラン夫人を見て、「薬ですって！ なんてこと！」と言います。

アンは自分の部屋へと走って行き、泣き出します。

数分後、アンの部屋に誰かがいますが、アンは泣いているのでその人が見えません。

「ああ、マリラ」とアンは言います。

「アボンリーの誰かが私のケーキのことを耳にするわ。彼らは私を笑うでしょうね。私はもう二度とアラン夫人と顔を合わせられないわ…。本当にごめんなさい。アラン夫人に伝えてちょうだい」

「あなたがアラン夫人に伝えればいいのよ」とある声と言います。

アンが振り返ると、アラン夫人が見えます！

「どうか泣かないで、アン」とアラン夫人はアンにほほ笑みながら言います。

「ケーキの中の薬は愉快的間違いよ」

「ああ、アラン夫人！」とアンは驚いて言います。

「本当にごめんなさい。私、ケーキを作るのが好きなの、でも今回は…」

「心配しないで！」とアラン夫人は言います。

「私の夫と私は、あなたやあなたの家族に会えてうれしいの。1階に降りて来て、あなたの庭の花を私に見せてちょうだい。私は花や庭が大好きなの。いつか、遊びに来て私のものも見たらいいわ」

アンとアラン夫人は1階に降りて、かわいらしい庭を歩きます。

およそ1週間後、アンは手に手紙を持って、キッチンの中へかけ込んでいきます。

アンは興奮しています。

「見て、マリラ！」とアンは叫びます。

「ここに私宛ての手紙があるの。封筒には私の名前があるわ」

アンはそれを素早く開けて、それを読みます。

「明日の午後、アラン夫人の家でお茶会があって、私が招待されているわ！」とアンは喜んで言います。

「新しい服を着て、新しい靴を履けるんだわ！」

お茶会の間、アラン夫人は「9月にね、アボンリーに新しい先生がやって来るの。彼女の名前はミュリエル・ステイシー、とってもいい人なのよ」と言います。

「あら、それはすてきね！」とアンは喜んで言います。

「私、新しい先生の名前が好きだわ。9月には学校が楽しくなるわね」